

元治二年乙丑元旦(慶應元年)

長門國河原の驛にあり、奇兵隊出張、福田良輔(侯平)、藤村太郎、小藤次郎助、真田市太郎、山田豊助、及南園隊佐々木男也、武元多聞等と同じく年を越ゆ。もとより陣中の事なれば、節餅の式等絶へてなし。唯菜根にて酒を酌みたり。藤村太郎に大晦夜歌あり。

七重八重圍みし仇の中なれば  
暮行く年の道やなからん

皆々早朝は朝拜し、畢りて或は直衣などを取出し、又は鎧なんきを着て、酔ふては放吟談笑、慷慨の餘憤やる所なきありさまなり。

此日秋方軍中より橋崎市太郎、勝田仁太郎兩

先鋒一番手となりて時山直八、三好軍太郎(後に陸軍中將子爵重臣)等百餘人二番手となりて時山直八、三好軍太郎等相携へて、薄曙伊佐驛を發し河原にて兵を揃へ、直に進んで繪堂に至り、姦吏の罪名を擧げたる戦書を帶刀に送り、及び策を萩野隊に施して傍看せしむ。忽ち銃砲を發して之を襲ふ。其音に驚波を交へ、恰も激雷の如し。天地震動す。敵對戦に及ばず兵器を捨て四方に散亂す。初砲の發する鶏鳴の刻より曙色に至る迄放發して不已盛と云ふ可し。

(時山直八は土佐にも赴きたる事あり、戯名漂流坊海月と稱しへうきなる様をなし、其容貌異常高く目

人來り諸隊へ命令を傳ふ。

二日 伊佐に行、昨夜より佐世八十郎(前原一誠)馬關より來り居り面談す此日槍隊にて大辭

三日 萩野隊山縣三左衛門、三村傳藏面會す

五日 河原に行

六日 雨天、此夕諸隊謀而粟屋帶刀の兵を繪

堂を襲ひ、大に其軍を敗り之を走らす、是より先き諸隊追討し唱へ、萩府姦吏等國侯の命

を矯め兵數千を出す、粟屋なる者千有餘人を率ゐて繪堂に陣す。是に因て諸隊等大いに怒

り、佐々木男也、天宮新太郎、福田良輔、藤

村太郎、真田市太郎等銃砲隊凡百人を率ゐて

四五

四五

三二八

三二八



今回の復刻版の装幀です(デザイン・毛利一枝)

傳達した。斯くして九月三日長州は井上聞多、廣澤兵助等が勝宮島に會見して折衝を續けるに至つた。十月二十六日には薩摩の小松帶刀、西郷吉之助等も愈々入浴し中岡の劃策を援助した。

### 天日の明を仰がん中岡の劃策

斯くて中岡は、京都に留つて同志と交る傍ら、土藩の青年子弟を教導して居たが、慶應二年も正に暮れんとする十二月五日に至り、長州壓迫の元兇たりし水戸系の慶喜が、十五代將軍軍職を繼いだので、中岡は従前骨肉も嘗ならざる程親密であつた、水戸本國寺派の住谷、酒泉迄等が、忽ち勢力を得て俄に權威を振ひ初めるや、痛憤して之れを断ち、嘗ては江戸坂下門事件の際斬姦書を起草した、同志の原市之進の如きも慶喜の爲に番大たるに至り、勤王の同志を裏切つたので、「不俱戴天の譬」を罵つて之を蛇蝎視するに至つた。元來中岡は正義一貫、俠骨の士であつたので、同志の敵となる者は何人たるを問はず絶体的に之を憎み、機會さへあらば之を除く事を念願した。故に元治元年には乾退助を殺さんとし、或は七首を懷にして西郷と對決したのみならず、時には島津久光が朝議を動かして公武合体に一步を進め、幕議を支持するに聞かぬは、薩南七十七萬石の藩主も

### 内容見本 (80%)

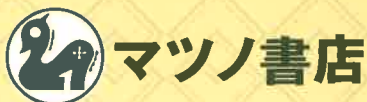
※四五一頁の続きです。

維新を先駆け、惜しくも暗殺された  
竜馬の盟友・慎太郎  
その先見性と波乱の生涯



尾崎卓爾〔著〕

限定二百部復刻



# 中岡慎太郎先生

なか／＼の意氣込であつたのを、中岡の熱心な努力に依り、次第に大勢は順調に向つて來た。

此の時自分は木戸の依頼により、黒田(了介)の紹介で、大宰府に行き三條公に面謁して、京都及長州の状況を報告しやうと、先づ薩摩から來て居る肥後直右衛門に逢ひたいと申込んだ。所が當時五卿に對する筑前側の待遇が、又復悪くなつ來て鷓んご檻禁同様の有様で、殊に其の頃五卿を關東に檻送しやうとの議あり、幕府の大目附小林甚六郎なる者が來て居たので、肥後も之を憚つて、自分の面會を拒んだ爲、此のやうな調子では逆も三條公にも逢へないと斷念し、其のま、馬關に引返し、それから高杉、木戸の二人と相談して京都へ赴き、右の顛末を西郷に話した所、此の頃既に薩長聯合の話が餘程進んで居て、薩摩では、木戸を京都に迎へる爲に、黒田了介が使者となつて、長州に行く事になつた所、高杉の奇兵隊を始め、藩論が未だ全く纏つて居なく、黒田は暫らく山口の旅館に滞在して居た。

その時自分も黒田と前後して西下し、木戸から談があつて、黒田の接伴役になつてゐたが、其の中に、中岡が大宰府から長州に來て詳しい事を聞き、井上聞多や自分等と力を黻せて諸隊を説き廻つた結果、漸く藩論が決したので、木戸が上京する事になつた。併し長州側ではまだ薩摩に

對して種々の危懼を抱き、『又藝の蛤御門の二の舞を喰はされては大變だ』と、遊撃隊、御楯隊、奇兵隊より、夫々一人づゝ木戸の護衛として同行せしむる事となり、品川彌二郎、三好軍太郎、早川涉の三人が、其の選に當つて、自分も木戸と共に上京したんだ。時は丙寅、即ち慶應二年の正月で、木戸は途中大阪で左の一絶を賦して自分達に示した。

天道未知是耶非、陰雲四塞日光微。我君邸閣看難是。春雨和淚滿破衣。

### 桂、中岡の誠意に驚く

個人個人の喧嘩の仲裁さへ、其の骨折りは一方ではない。まして天下の二大雄藩が反目嫉視し、殊に戦争までした仲を、握手せしめんとする其の苦心は思ひ知らるゝのである。

扱ても中岡は、田中と共に馬關にあつて熱心に劃策して居つたが、一進一退、容易に運動は進展しない。一方中岡は其の事情を京都に居る坂本に通知するに共に、八月六日田中が大宰府から歸つたので即日左の書面を桂に發送した。

華墨拜誦仕候、昨日は萬々奉謝候、借て府(長府)の一條に就ては條公方に於ては其の眞味を知る





## 『中岡慎太郎先生』は良い本だ

一坂 太郎

土佐を脱藩した中岡慎太郎が、高杉晋作はじめ吉田松陰・久坂玄瑞といった「長州志士」の詩歌を書き写し、人に贈ったものを見たことが何度かある。「志士」と称する若者は、とりわけ自己顕示欲が強かったようで、自作の詩歌を書き与えたがった。そんな中で他人の詩歌を書いていた中岡は、異色の存在に思える。一体、どんな心境だったのか。

中岡が高杉・久坂に、傾倒していたことは確かだ。たとえば「第二回時勢論」では二人とも、機を見ることが出来る「非常の士」だったと絶賛している。あるいは、西洋が内戦を繰り返して今日の盛況に至ったことを忘れるなという意味の、高杉の言を引く。中岡は高杉らの詩歌を広めることで、朝敵である長州藩の理解者を増やし、同志のネットワークを築こうとしたのだろう。中岡は長州の宣伝マンとしての役も担っていたのだ。

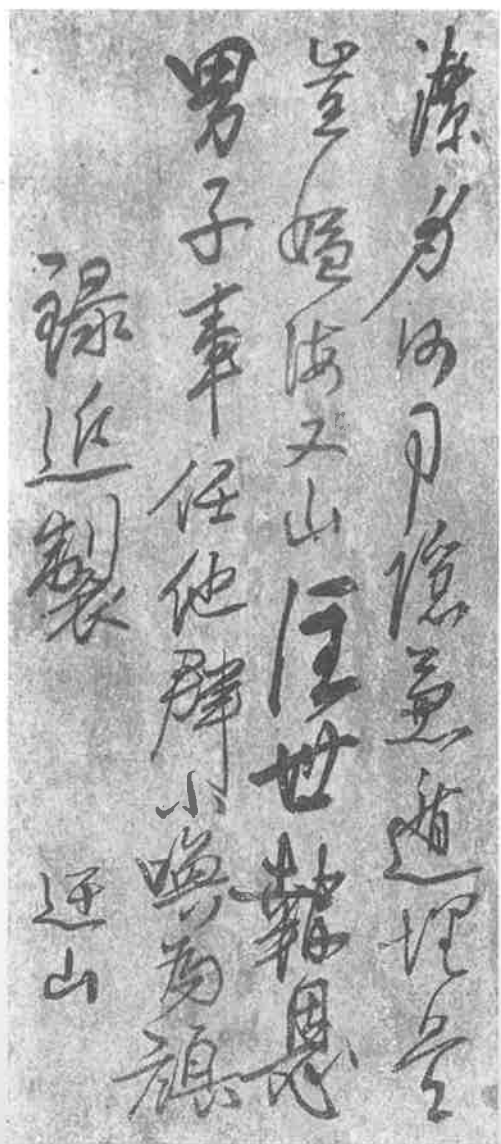
今回マツノ書店から復刻される尾崎卓爾『中岡慎太郎先生』にも、高杉没後のこととして、中岡が「魚見絲綸去 鳥窮矢弓飛 人情飜覆事 我早識其機」としたため、土佐の同志に示し、「此れは亡友高杉春風（晋作） 国難中の作であるが、僕に取っては唯何となく涙の思出がである」と語り、涙ぐんだという逸話が出てくる。この詩は人の世の常である裏切り行為を、弱い魚や鳥にたとえたもの。下関開港論を唱えた高杉が、身内の裏切りに遭い反対派から生命を狙われたさい作った詩だ。変革者の孤独と、人に対するある種の諦めが感じられる。浪士として苛酷な環境下で走り回った中岡にとっては涙が落ちる程、共感出来る内容だったようだ。

こんにち、中岡と言えば坂本龍馬と一緒に暗殺されたという一点のみで、その名が知られている。龍馬英雄伝の脇役であり、ややもすると龍馬の女房役にされてしまう。しかし長州寄りである中岡の活動は、薩摩寄りの龍馬のそれとは異なる軌跡を描く。

長州にせよ薩摩にせよ、水面下で中岡のような他国の浪士に危険な任務を与え、ずいぶんと利用して、見殺しにもしているが、その実態は十分解明されているとは言いがたい。むしろ避けられて来たテーマのひとつで、講談小説における龍馬のヒーローぶりばかりが、まことしやかに伝えられる。なぜ、脱藩してまで地位や名誉、財とも無縁の危険な活動に身を投じる必要があったのか。現代だからこそ考えねばならない問題である。

そのための参考文献として期待出来る『中岡慎太郎先生』だが、『中岡慎太郎』の題で大正十五年十一月、青山書院から出たのが初版だ。さらに時代背景などが書き込まれ、史料も追加された増補改訂版『中岡慎太郎先生』が昭和二年十二月に坂本・中岡両先生銅像建設会から出て、版を重ねた。初版は本文三七八頁だが、増補改訂版は五〇二頁もある。著者が並々ならぬ情熱をもって、繰り返し手を加えたことがうかがえる。このようにゴツゴツとした手触りがする本は、私に言わせると「良い本」だ。

なお、著者の尾崎卓爾について、中岡と同郷という以外私は何も情報を持たない。以前国会図書館で調べたら、尾崎の著書として他に『市民坂本志魯雄』（昭和七年、市民会）が見つかったくらいだった。坂本は土佐の自由民権運動家で、国会議員になった人物である。



中岡慎太郎の書（田中光顕蔵 本書より）

# 日本で初めての伝記『中岡慎太郎先生』

中岡慎太郎館学芸員 豊田 満広

幕末ファンが坂本龍馬を語る際には必ずと言っていいほど中岡慎太郎が登場し、二人が最強のタッグパートナーなにいし親友として語られる。では、中岡慎太郎がどんなことをした人物か？と問えば、坂本龍馬と一緒に近江屋で殺された人、あるいは龍馬と一緒に薩長連合を成立させた人、というのが大方の返事だろう。

これは中岡慎太郎に関する史料の現存数が少ないことによる。

龍馬の手紙の現存数が一三五通（文献に記録されている手紙も含む）なのに対して慎太郎は六二通である。その記述は必要最小限の事しか書かず、重要事項になると、詳しい事はお会いしたときに申し上げます」というものが多い。また署名もほとんどが変名である「石川清之助」で、「中岡慎太郎」は四通しか伝わっていない。さらに、薩長連合に奔走している時期は「寺石貫夫」、「大山彦太郎」、陸援隊結成の時期は「横山勘蔵」など事業ごとに名前を変えている。

中岡慎太郎を調べる際はこれらの事を留意しなければならぬ。

そこで、『中岡慎太郎先生』の復刊は、「幕末の志士」慎太郎の人物像、活動内容等を知る上で欠かせないツールとして貴重である。



## 目次

### 中岡慎太郎先生年譜

- 「光次をやれやれ！」
- 鶏群の一鶴
- 尊王攘夷の発端
- 民心動揺と黒船の来航まで
- 徳川幕府の進退難
- 光次の修養時代
- 光次の生ひたち
- 梟雄井伊大老の惨死まで
- 里正時代の光次
- 公武合体と閩藩勤王論
- 土佐勤王党の成立
- 光次と新井次郎
- 京洛の遊び
- 承久の昔を偲ぶ岩佐の会合
- 伏見寺田屋騒動
- 光次再び京師に招かる
- 井上佐一郎の暗殺
- 久坂と俱に象山を訪ふ
- 中岡容堂を酒席に直諫す
- 最後に踏む故郷の山河
- 父妻に生別して三田尻に脱走す
- 同志続々中岡の跡を追ふ
- 天誅組の義挙
- 長州の梁山泊
- 中岡薩藩の美情を探る
- 国士北添信磨の人となり
- 家茂参朝と薩長の隔執
- 如雲の密法勤行を探る
- 如雲誅戮叢間に達す
- 信磨の家書と新撰組
- 乾呻一擲の快筆畧ぼ整ふ
- 信磨以下二十余名闘死す
- 英雄的真骨頂
- 九門の役
- 決死して中立賣門に戦ふ
- 「中岡は土佐人の典型だ」
- 忠勇隊長に推される
- 薩長連盟の萌芽
- 廿三士野根山の義挙
- 奈半利川の殺戮二十有二
- 薩長連合運動の前提
- 西郷と薩長連合を策す
- 奇兵隊の蹶起
- 五卿の筑前遷座に随ふ
- 「吾身可死而未死」

『中岡慎太郎先生』は、初版本『中岡慎太郎』（大正一五年一月二六日発行）を増補改訂して、昭和二年一月三〇日発行された本である。いわば最初に書かれた中岡慎太郎の伝記である。小説的な叙述であるが、郷土の英雄として語る初版本と異なり、増補改訂版は幕末政局の動向や慎太郎の活動を位置づける叙述に変わっている。また、本書には慎太郎が書いた「海西雜記」、「行行筆記」一、二と題した日記三冊が収録されていることも特筆すべき点である。

最後に著者の尾崎卓爾（一八九三〜一九五八）ならびに彼の執筆動機を紹介する。

尾崎は、中岡慎太郎の故郷、高知県安芸郡北川村の出身。明治大学を卒業後、土陽新聞社速記部長、徳島日日新聞東京支局長などを務めた。執筆の動機は、父熊吉が語る慎太郎の話を聞きながら育ったこと、「優れた才略と胆力と人格を有した人物で、回天の大業を空拳に築き、維新の元勳として功績最も多く、稀世の英傑」であるのに北川村には慎太郎を称える石碑すらないことを嘆く父の言葉に一念発起した、と巻頭の序文で述べている。

尾崎の執筆を知った元陸援隊員田中光頭は、資料提供および様々な助言を行うなど積極的に協力している。そして昭和二年、北川村柏木の慎太郎顕彰碑の除幕式にも参列するなど慎太郎顕彰に関わっている。

- 惨憺たる中岡の苦心
- 田中伯の懐旧談
- 桂、中岡の誠意に驚く
- 渡欧を断念す
- 警世の一大文字
- 薩長同盟漸く成る
- 中岡の殊勲を激賞す
- 寺田屋の難に赴く
- 萬重の意を籠めし家書
- 這個の消息
- 薩長同盟善後の苦心
- 関門の戦況
- 中岡の藩政改革論
- 天日の名を仰がん中岡の対画
- 「何か御為に相成る事を、」
- 三條岩倉の提携
- 「お互い国の為に命を捨やう」
- 中岡の第二回時勢論
- 大政返上策の経緯
- 硬軟両派の暗闘
- 愈々陸援隊成る
- 草莽を以て天下を動かさん
- 眼光炬の如き第三時勢論
- 坂本と大政奉還を議す
- 大政返上の幕
- 宮川助五郎を引取る
- 突如！刺客来る！

噫！出師未捷身先死

陸援隊士の復讐

功烈炳焉として永く青史を照す

付 録

中岡慎太郎日記 幕末の三年史

自慶応元年元日至同年六月十五日

自同二年十一月十六日至同年十二月

月卅日

自同三年一月元日至同年八月卅日

柏木に遊びて

## 復刻に際して

▼幕末、肥後を脱藩し尊攘運動に奔走した木曾源太郎（二八三九〜一九一八）の回顧録「回瀾余滴」（坂太郎氏所蔵）全二十二項より「緒言」と「石川誠之助」（中岡慎太郎）の項を新たに活字化し、巻末に付します。

▼B6判の原本をA5判に拡大しました。

■ 体 裁 A5判上製箱入 五〇〇頁

■ 定 価 一万二千元（税込・千別）

■ 予約特価 一万円（税・千込）

■ 予約締切 平成21年11月30日

■ 発 売 平成22年1月中旬

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

限定二百部復刻（番号入）

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。

山口県周南市銀座2-1-13 マツノ書店

☎0834-2295